

ドイツ・ポップス小史（1）

若山 俊介

0. はじめに

勤め先で担当している授業はドイツ語、ドイツ文化論、及び両者の関連科目である。その授業の中で、ときおりドイツ・ポップスを使っている。また、このドイツ・ポップスは現在のところ、自分の重要な研究対象の一つでもある。なぜドイツ・ポップスなのかというと、まずその歌詞を使って、常に変動する言葉の世界の中で、最新の、それがオーバーであれば少なくともより新しいドイツ語を比較的早い時期に勉強できるということである。例えば Rinderwahnsinn という語があるが、これは「狂牛病」のことで、その日本語は今では誰が聞いても驚かないほど人口に膾炙した言葉である。このドイツ語に出会ったのはロック・グループのディー・トーテン・ホーゼンに関する論文を書いているときであった。彼らの歌の中の一つにこの言葉が出ていたのだが、当時はまだ独和辞典にも載っておらず、それが何を意味するのか理解するまでに相当な時間を要したのを記憶している。この種の新しい出来事から生まれてきた言葉は、もちろん歌からではなく、雑誌などから仕入れることも可能であるが、すでに新しい歌に取り上げられておりながら、今の独和辞典にはまだ掲載されてないという事態は実際のところよくあることなのである。

ドイツ・ポップスを自分の研究対象にしているもう一つの理由としては、歌詞の内容に、現代のドイツのいろいろな問題が取り上げられているということがあ。例えば筆者がこれまで取り上げた問題を羅列してみても、まずこれはいくらか古いテーマだが東西ドイツ問題、そして外国人問題、関連してネオナチ問題、失業問題、青少年のアルコール中毒や麻薬問題、環境破壊などと実にさまざまである。歌を通じて、ドイツの現在の状況をよりリアルに知ることができるのである。

今回は、そんなドイツのポップス、あるいはロックについて歴史をたどってみたいと思う。というのも、これまでは歌詞の内容に立ち入ることばかりが多く、ドイツ・ポップスの世界を歴史的に眺めることはごく断片的にしか行ってこなか

ったからである。いうまでもなくポップスというものはまず音楽であり、それについての場合歌詞が伴うものであるということが出来る。その音楽自体について系統的に述べることも意味のあることと思う。また、第二次世界大戦後から現代に至るまでの傾向をなぞってみることは、戦後の庶民の生活方式や思考方式の変化を俯瞰することにもなると思う。その際必要に応じて日本との比較も適宜織り交ぜて、ドイツとの相違点や共通点も明らかにしてみたいと考えている。

とはいうもののポップスというジャンルは、日本の場合を考えてもすぐにわかることだが、あまりに広範かつ多岐にわたるものである。それゆえその全体を網羅的に紹介できるなどとは初めから考えていないということをことわっておきたい。つまり本論は、これまで自分がレコードやCD、コンサートなどで出合ったミュージシャンとそのアルバムを中心にして、おおまかな流れを紹介するという程度のもの、それも多分に主観的なものにならざるをえないということである。

I. ドイツ・ポップスの日本への受容の実態

さて、ドイツ・ポップスとか、ドイツ・ロックなどといっても、ここ日本では普段そうそう耳にすることのない縁遠い存在といえるだろう。というのも、この分野のものは、極端に言えばほとんど全てがアメリカ経由でしか日本に入っていないという現状があるからである。日本で知られるドイツのミュージシャンは、例えばヘビーメタルの代表的バンド、スコーピオンズ (Scorpions) のように英語で歌っているもの、あるいはクラフトワーク (Kraftwerk; ドイツ語ではクラフトヴェルクと読む) などはテクノというのかヒップホップというのかコンピュータサウンドを駆使した実験音楽的なものである。両者はいずれもすでに英語圏の国々でも地歩を得、ドイツという国籍がほとんど意識されない存在である。以前はアメリカを経由することなく、ヨーロッパで流行している音楽を、そこから直接日本に輸入するという時代もあった。それが例えば、1960年代のシャンソン・ブームであり、カンツォーネ・ブームだったわけである。そんな流れの中で、ウド・ユルゲンス (Udo Jürgens) などは、1960年代後半から70年代初めにかけて日本に紹介され、実際にヒットし、来日してファンもできた数少ないドイツ語圏の歌手であった。彼はオーストリア、クラーゲンフルトの出身であるが、その持ち歌のほとんどを自ら作曲し、一部作詞も行っている典型的なシンガー・ソン

グ・ライターである。30歳ころから活動を始め、数々のヒット曲を生み出した。その後も70歳を超える現在まで精力的な創作を続け、ヨーロッパでは今なお圧倒的な知名度を誇るミュージシャンである。

当時のユルゲンスは「ヨーロッパの貴公子」というキャッチフレーズで『夕映えの二人』というヒット曲をひっさげて日本に登場した。この曲はなかにし礼によって日本語の詞もつけられ、ペドロ・アンド・カプリシャスの歌としてもヒットした。この歌の日本語題名は『別れの朝』といい、「別れの朝、二人は冷めた紅茶飲みほし・・・」という歌い出しであった。しかし、これはドイツ語の歌詞の内容とはほとんど無関係であり、さらにユルゲンスの歌の『夕映えの二人』という題名もドイツ語の原文とは関係のないものであった。その原題は『Was ich dir sagen will』で、これは「私があなたに言いたいこと」という意味である。歌の内容も「あなたに寄せる愛の思いは言葉ではうまく伝えられず、その代わりに私の弾くピアノが伝えてくれる」というものである。ユルゲンスはこの歌をドイツ語で歌い、同時にみずからピアノも弾いたのである。そのさっそうとした姿が「貴公子」にふさわしく、来日もしてコンサートを開き、多くのファンを獲得することになったのである。

その後、つまり70年代後半から現在に至るまでの傾向はすでに述べた通りである。つまり、アメリカで当たったものは日本にも優れたものとして紹介されるが、仮にヨーロッパでヒットしたものでも、アメリカでヒットしなければ、日本の私たちの耳にふれる可能性は限りなく低くなるということである。そんなケースの代表的な例として挙げられるのは、ネーナ（Nena）である。ネーナのそのヒット曲は日本語タイトルを『ロックバルーンは99』というが、1983年にまずドイツのチャートで20週ほどベストワンの地位を維持し、続いてアメリカでも注目されビルボードなどのヒットチャートで1位、2位にいくんだ。ちなみに英語のタイトルは『99 Red Balloons』となっているが、歌はドイツ語のまま歌われた。その後すぐに、日本にも紹介されることになった。これが、アメリカのヒット曲ならなんでも日本へ持ってくるという業界の戦略なのである。ボーカルのネーナはとにかくかわいく、美しく、日本でも多くのファンを獲得し、84年には来日してコンサートを開いている。

さて、この曲の歌詞は以下のとおりである。

Nena: 99 Luftballons

Hast du etwas Zeit für mich
Dann singe ich ein Lied für dich
Von 99 Luftballons
Auf ihrem Weg zum Horizont
Denkst du vielleicht g'rad an mich
Singe ich ein Lied für dich
Von 99 Luftballons
Und das sowas von sowas kommt

99 Luftballons

Auf ihrem Weg zum Horizont
Hielt man für Ufos aus dem All
Darum schickte ein General
'Ne Fliegerstaffel hinterher
Alarm zu geben wenn's so wär
Dabei war'n dort am Horizont
Nur 99 Luftballons

99 Düsenflieger

Jeder war ein großer Krieger
Hielten sich für Captain Kirk
Das gab ein großes Feuerwerk
Die Nachbarn haben nichts gerafft
Und fühlten sich gleich angemacht
Dabei schoss man am Horizont
Auf 99 Luftballons

99 Kriegsminister

Streichholz und Benzinkanister
Hielten sich für schlaue Leute
Witterten schon fette Beute
Riefen: Krieg und wollten Macht
Man wer hätte das gedacht
Dass es einmal so weit kommt
Wegen 99 Luftballons

Wegen 99 Luftballons...

99 Luftballons...

99 Jahre Krieg

Ließen keinen Platz für Sieger
Kriegsminister gibt's nicht mehr
Und auch keine Düsenflieger
Heute zieh ich meine Runden
Seh' die Welt in Trümmern liegen
Hab' 'nen Luftballon gefunden
Denk' an dich und lass' ihn fliegen

ネーナ：99の風船

あなた、私のためにちょっと時間ある？
だったら、あなたのために歌を歌ってあげる
それは99の風船についての歌
水平線に向かう途中の風船についての歌
あなたはもしかして今私のことを思っているかも
だったら、あなたのために歌を歌ってあげる
それは99の風船についての歌
そして何がどうしてどうなったかの歌

99の風船

それは水平線に向かう途中だった
人々はそれを宇宙から来たユーフォーと思い込んだ
それで軍の司令官は飛行中隊を派遣して
後を追いかけさせた
時と場合によっては空襲警報を発令するように
ただその水平線には
99の風船が飛んでいただけなのに

99のジェット戦闘機のパイロット

その誰もが偉大な戦士だった
彼らはキャプテン・カークを気取っていた
そのとき大きな花火が打ち上げられた
隣の国の人たちは何が起きたか理解できず
何か火をつけられたような気持ちになった
それで水平線の99の風船をねらって
爆弾をぶっ放したのだ

99の国防大臣

マッチとガソリタンクのような危ない存在
けれど自分たちは知恵の回る人間のつもりでいた
彼らは格好の獲物を察知したように思い込んでいた
そして叫んだ「戦争だ！戦力を整えろ！」
さてさて、いったい誰が考えただろう
99の風船のために
ことがこんなところまで発展してしまうなどと

99の風船のために・・・

99の風船・・・

99年続いた戦争

それは勝者の座る席は残さなかった(勝者はなかった)
国防大臣ももういない
それからジェット戦闘機もね
今日、私があたりを歩いて見てるのは
世界が廃墟と化している、その様子
風船をひとつ見つけたわ
あなたのことを思い、そっと飛ばしてやろう

この歌は「99の風船」という一見平和そうなものが、ちょっとした誤解により全世界を巻き込む大戦争を引き起こしてしまい、最後には地球全体が廃墟に化してしまうという内容である。まだ東西の冷戦状態が続いていた当時、核戦争の脅威を警告する歌としてアメリカにも受け入れられたのである。

余談になるが、この歌で「風船はなぜ99個なのか」ということにこだわった者がいる。私のゼミの学生であるが、彼の解釈によると、これは1999年をさしており、ノストラダムスの大予言で世界が滅びる年を象徴するものであるということである。詩や歌のタイトルや内容については、人によりさまざまな解釈が可能であり、そのどれが正解ということではないと思う。複数の解釈が並行して成り立つところがその面白さ、魅力の一つなのである。この「なぜ99なのか」という問題についても、他にいろいろな解釈ができるだろう。いずれにしても99という数字は、100という切りのいい、落ち着いた状態の一步手前であり、ある種のカウントダウン、カウントアウト的な気分、つまりワクワクするような、時にはせっぱ詰まった気分を表すものと考えてよいのではないだろうか。

Ⅱ. シュラーガーとドイツ語ロック

ここでドイツの歴史の概略を押さえておきたい。

1945年：ヒトラーのナチス・ドイツ敗戦による第二次世界大戦の終了。

ドイツは英・米・仏・ソ連の4国により分割統治。

1949年：英・米・仏側の西ドイツとソ連側の東ドイツに分裂、両国の独立。

1961年：ベルリンの壁構築。東西冷戦の象徴となる。

1989年：ベルリンの壁崩壊。

1990年：ドイツ再統一。

概略とはいうものの、とんでもなく簡単なものと思われるかもしれない。それでもこれから話を進めていく上で最低限頭に入れておきたい事件である。これに音楽、つまりポップスの世界での、例えばプレスリーやビートルズなど世界的な出来事が加わることになる。

おおざっぱではあるが、こんな流れの歴史の中でドイツ・ポップスも変遷していくことになる。しかし、その前にまずドイツの伝統的な、典型的なポップスである、ドイツ語でシュラーガー (Schlager) と言われているものを紹介しておき

たい。この語の意味は英語の「ヒット」と同じで、「歌謡曲」くらいに理解しておけばいいものである。そのシュラーガーは音楽的にはドイツの伝統的な民謡とか、フランスやイタリアのヒット曲などの影響が強く感じられる響きであり、言葉では言い表しにくい、いわば「ブンチャカ・ブンチャカ」といった単純なリズムのものである。これに時代の移り変わりにつれ次第にロックの影響も加わってくる。ほとんどの曲はプロの作詞家、作曲家により作られ、それを有名無名の数多くの歌手が歌うという構図は、日本の歌謡曲の世界と同様であるが、中には先に挙げたウド・ユルゲンスなどもこのシュラーガーに分類される存在といえるだろう。また内容的にはやはり愛や恋の歌が圧倒的に多い。つまり「あなたが好きだ」とか「別れても忘れられない」とかいった他愛のないラブソングである。しかし、中には内容のある優れた歌もある。「内容のある」というのは例えば生きることのすばらしさをたたえたり、逆に自殺することの無意味さをさとすといったいわば人生の応援歌的なものである。それはある意味で、日本の演歌の歌詞に通じるところもあるといえる。つまり、ここで例として挙げるのが適当であるかどうかはなはだところもとないが、『365歩のマーチ』で「幸せは歩いてこない、3歩進んで2歩さがってもいいから、とにかく前に進もうじゃないか」といった類のものである。

そんなシュラーガーから一つだけ紹介する。パトリック・リントナー (Patrick Lindner) という人気歌手が歌う『あなたは今日一日を本当にもう生きましたか』と訳せる1996年のヒット曲である。この曲をここにもってくることについては確たる理由はない。ましてや、このジャンルを代表する曲であるなどというつもりもまったくない。ただ、たまたま手許にあったというだけのこと、しかしそれでも数あるシュラーガーの中の一つの典型といえるものと判断したからである。

詳しくは歌詞を読んでほしいが、私たちは単調に過ぎていく毎日、つつい生きることの意味を見失いがちである。その中で自分が今、こうして生きていることを実感することの大切さが淡々と歌われている。とくにサビの部分で、「あなたは今日一日を本当にもう生きましたか。自分が存在していることをもう感じましたか。心臓の響きに耳を傾けましたか。」と問いかけて、「自分自身を愛することのできる人だけが、人生を愛することができる」というのが、この歌のメッセージということができる。

Patrick Lindner: Hast du heut' wirklich schon gelebt

Hast Du nicht schon oft gesagt:
"Ich habe viel zu wenig Zeit",
warum nimmst Du nicht den Tag,
den Dir heut' der Himmel leiht,
und sag' nicht nur "irgendwann",
fang endlich einmal an zu leben.

Komm, flieg dem Sonnenstrahl nach
und den Sternen der Nacht,
lass den Rest dieser Welt hinter Dir,
mach Dich frei von dem Wahn,
denn Du weißt, irgendwann
musst Du fragen:

* Hast Du heut' wirklich schon gelebt,
schon gespürt, das es Dich gibt,
Deinem Herzschlag zugehört,
nur für einen Augenblick,
und vergiss das "Wie",
nur wer sich selber liebt,
der kann das Leben lieben.

Hast Du heut' wirklich schon gelebt,
oder nur die Zeit vertan,
jeder Sonnenuntergang
erinnert Dich daran,
ohne Wiederkehr und für alle Zeit vorbei,
ein Tag von Deinem Leben. *

Immer wieder schwörst Du Dir:
"Aber heut' nicht mit mir",
sag doch einmal: "Jetzt komm ich",
irgendwann geht's ohne Dich,
und nur der Himmel weiß,
wie viele Sommer Dir noch bleiben.

Komm, sag ein ehrliches "Nein",
zu Gefühlen aus Schein,
zu den Lügen in unserer Zeit.
Es zählt nur, was Du willst,
und was Du wirklich fühlst,
tief im Herzen.

~ (Refr.)

あなたはもう何度もこう言いませんでしたか?
「私にはあまりに時間が少なすぎる」と。
天が今日あなたに与えてくれたその一日を
あなたはなぜ受け取らないのですか?
「いつかそのうち」と言ってばかりいないで、
いいかげんにもう、生きることを始めたらいい。

さあ、太陽の光りを求めて、夜の星々を
求めて飛びなさい。
この世界の残りは後に放っておいて、
迷いから解き放たれなさい。
なぜなら、あなたにはわかっているはずだ、
いつかあなたはこう尋ねなくてはならないことを。

* あなたは今日一日を本当にもう生きましたか。
自分が存在していることをもう感じましたか。
心臓の響きに耳を傾けましたか、
ほんの一瞬にしても。
「どうしたら」などということは忘れなさい。
自分自身を愛することのできる人だけが
人生を愛することができるのだから。

あなたは今日一日を本当にもう生きましたか。
それともいたずらに過ごしてしまいましたか。
太陽が沈むたびに、あなたに
思い起こさせることがあるでしょう。
再び戻ることなく、永遠に過ぎ去るもの、
それがあなたの人生のこの一日なのだ。*

あなたは何度もこう言ったでしょう。
「いいから今日は俺なしでやってくれ」と。
「さあやるぞ」と一度言ってみたらいい。
あなたがいなくても済むときはいずれ来る。
あなたにあといくつの夏が残されているのか、
それは誰にもわからない(天だけが知っている)。

さあ、正直に「ノー」と言ってみなさい、
見せかけの感情に対して、
私たちのこの時代の嘘に対して。
大切なのは、あなたが望んでいるもの、
あなたが心の奥深くで、本当に
感じているものだけなのだから。

~ (の部分、繰り返し)

さて、先にも述べたように、プレスリーやらビートルズ、ボブ・ディランなどの、音楽界の世界的大事件といえる一連のミュージシャンたちの影響がドイツにも当然及ぶことになる。ドイツ人も初めは日本の場合と同じで、アメリカやイギリスのコピー、つまり必然的に英語で歌うことが主流になり、それは現在まで続いているということもできる。もっとも現在は、もうドイツ人がコピーするというのではなく、オリジナルの歌手、グループ、名前を挙げていけばきりはないが、例えばU2とか、エアロスミスとか、マドンナ、マイケル・ジャクソン、マライア・キャリーといった人たちが直接ドイツでコンサートを開き、あるいはCDを出し、活躍する時代である。これも日本と同じ現象といえるだろうか。いずれにせよ、ここでは「ドイツでも英語の歌が主流である」ということを繰り返しておきたい。

さて、話を戻したい。すでにドイツの歴史概略で見たように、ドイツは1949年以降、東西で別々の道を歩いて、そういう関係が1989、1990年まで、実に40年に渡り続くわけである。その間、西ドイツではポップス、というよりはロックというべきだろうか、60年代後半にドイツ語でロックを歌うことへの格闘が始まる。ロックには当然それが生まれた国の言語である英語のほうが歌詞としてはなじむ。しかし、英語を母国語としない国の人々にとっては、英語の歌詞だけでは次第に満足できなくなる。歌うほうも聞くほうもなにかもうひとつしっくりこない感覚をもつのである。そこで何とかしてドイツ語でロックを歌えないだろうかという願望が生まれてくる。英語で歌うことに違和感、あるいは限界を感じ、そこからドイツ語によるロック音楽をめざした当時の代表を3人挙げてみたい。それは、ウド・リンデンベルク (Udo Lindenberg)、ニーナ・ハーゲン (Nina Hagen)、そしてリオ・ライザー (Rio Reiser) である。リンデンベルクについてはすでに別のところで再三取り上げたことがあるので、またニーナ・ハーゲンはその奇怪な出立ちや言動ですでに広く知られ、日本にもフリークがいるので今回取り上げることはしない。ここでは残るリオ・ライザーを少々詳しく見てみようと思う。彼は日本ではまずまったく知られていないが、ドイツのロック界では特異な存在であると判断するからである。まずは彼の曲を一つ紹介したい。タイトルは『みんな嘘』 (Alles Lüge) という。

Rio Reiser: Alles Lüge

Es ist wahr, dass das Jahr über dreihundert Tage
in nur zweiundfünfzig Wochen schafft.

Es ist wahr, es ist wahr, dass das Ausland
vielmehr Ausländer als Deutsche hat.

Es ist wahr, dass die Sonne nicht um die Erde
und der Mond nicht um 'n Fußball kreist.

Es ist wahr, dass der Gründer von New York
nicht Kamel oder Camel,
sondern Stuyvesant heißt.

Das ist wahr, das ist wahr.

Aber sonst, aber sonst.

Alles Lüge, alles Lüge, alles Lüge.

Es ist wahr, es ist wahr,
die meisten Menschen
wollen nicht in Dortmund leben,
sondern Essen.

Es ist wahr, es ist wahr, dass die Kühe
das Gras nicht rauchen, sondern fressen.

Es ist wahr, es ist wahr, dass Hamburg
nicht die Hauptstadt von Mac Donald's ist.

Es ist wahr, es ist wahr, dass der Papst
zwar die Pille nicht nimmt,
aber trotzdem keine Kinder kriegt.

Das ist wahr, das ist wahr.

Aber sonst, aber sonst.

Alles Lüge, alles Lüge, alles Lüge.

Selbst wenn du mich fragst,
ob ich dich liebe und ich sag ja,
weiß ich manchmal nicht genau,
ist das nun Lüge oder wahr,
weil ich oft gar nicht mehr weiß,
was ist das Liebe.

Liebt der Papa sein Auto,
liebt die Mama den Kaffee,
liebt das Baby seine Windeln,
wie der Weihnachtsmann den Schnee,
lieben Kinder Schokolade,
wie die Hausfrau den Herd.

Oder ist da mehr, oder ist da mehr.
oder ist das, oder ist das, oder ist das.

Alles Lüge, alles Lüge...

リオ・ライザー：みんな嘘

一年は300日以上であり、たったの52週で
成り立っているということ、それは本当だ。

外国にはドイツ人よりもずっと多くの外国人が
いるということ、それも本当、本当のことだ。

太陽は地球の周りではなく、月もサッカーボール
の周りを回っているのではないというのは本当。

ニューヨークの創始者の名前は
カメルでもキャメルでもなく、
スタイヴサントということ、それは本当だ。

それは本当だ。みんな本当だ。

でも、その他は？ それ以外のことは？

みんな嘘、嘘ばかり、嘘だらけ。

本当さ、ほとんどの人々は
ドルトムントには暮らしたがらず、
エッセンを望むということ、
それは全く本当のことだ。

本当さ、牛たちは草を吸うのではなく、
食うのだということ、それは本当のこと。

本当さ、ハンブルクはマクドナルドの首都では
ないということ、それは全く本当のこと。

本当さ、(ローマ) 教皇はなるほどピルは
飲まないが、にもかかわらず子供ができて
しまうことはない、それは本当のこと。

それは本当だ。みんな本当だ。

でも、その他は？ それ以外のことは？

みんな嘘、嘘ばかり、嘘だらけ。

君が僕に尋ねる、君のことを愛しているか、
そして僕は「うん」という。そんなときですら、
僕はよくわからなくなってしまうことがある。

それ嘘なのか本当のことなのか。

なぜって、僕にはもう全くわからないからさ。

愛、それが何なのか？

パパは自分の車を愛し、

ママはコーヒーを愛し、

赤ちゃんはおむつを愛している。それはちょうど
サンタさんが雪を愛するのと同じこと。

子供たちはチョコレートを愛している。それは
ちょうど主婦がかまど(家庭)を愛するのと同じ。

それ以上のものはある？ それ以上のことは？

それともそれは、それともそれは。

みんな嘘、嘘ばかり・・・

リオ・ライザーは1950年の生まれであるが、14歳頃にはもうビートルズやローリング・ストーンズの熱狂的なファンとなっていて、1965年、66年にデガラクスイス (Degalaxis) というバンドを結成する。そこでは英語で歌っていたが、同時にドイツ語で歌う可能性をすでに探っていた。そして、1970年の初シングルで『お前たちを壊すものを破壊しろ』(Macht kaputt, was euch kaputt macht) というタイトルのヒットを飛ばす。バンド名もトーン・シュタイネ・シェルベン (Ton, Steine, Scherben) と変えて本格デビューする。これは「粘土、石、破片」という一風変わった意味だが、これはトロイア遺跡の発見者として有名なハインリッヒ・シュリーマン (Heinrich Schliemann) の言葉「私が見つけたのは、粘土であり、石であり、破片であった」にちなんで付けられたものであるという。このグループは1985年に解散するが、それまでドイツ・ロック界では常にセンセーショナルな存在であり続けた。

バンドを解散した後、ライザーはしばらくの潜伏期間をおき、86年頃からソロ活動を開始する。その最初の大ヒットは86,87年にかけてドイツ・チャート上位を占めた『ドイツの王様』(König von Deutschland) である。上に挙げた『みんな嘘』も実はこの時期の作品であり、そういう意味ではすでにドイツ語ロックが完成されて久しい時代のものであることを付け加えておかなければならないだろう。ところで、この歌はよくよく読んでみると「愛というものの意味がわからなくなってしまう」という一種のラブソングなのであるが、それ以上に、世の中にさまざまな形で露呈する矛盾や欺瞞、嘘に対するやりきれない気持ちを爆発させたエネルギーに満ちあふれた歌になっている。よくも悪くもすでに「出来上がってしまった」社会、もはや変革というものが望みようもない先進諸国の既成の枠組みに対する不満をぶちまけたメッセージソングなのである。

Ⅲ. ノイエ・ドイッチェ・ヴェレとその後

前章では、ドイツの伝統的ポップスであるシュラーガーとロックをドイツ語で歌おうとする者たちを紹介した。これらドイツ語ロックのさきがけとなる試みの後、再三述べるように、ドイツ・ポップスではドイツ語で歌うグループと英語で歌うグループとに分かれていく。その中で、ここではドイツ語で歌うグループの方に注目していくことにする。そうしたドイツ語で歌うグループが急増したのは

1980年代前後のことである。その時代、ドイツ・ポップス界では「Neue Deutsche Welle」という動きがあった。この「ノイエ・ドイッチェ・ヴェレ」というのは、英語で言えば New German Wave だから、「新しいドイツの波」くらいに訳せるものである。この「ノイエ・ドイッチェ・ヴェレ」は一つの同じ傾向をもった音楽というわけではなく、共通点といえば、とにかくドイツ語でポップスを歌うということくらいで、あとはなんでもかんでもかまわないという一つの流れだった。これは本当に一時期の、短期間の音楽界の現象だった。その証拠に、何百というグループが登場しながら、数年たった80年代半ばにはすぐに衰えてしまい、当時多少名の知られたグループもその大部分はいつのまにか消えていってしまったのである。これは日本でいうならグループサウンズやフォークソングの時代を思わせる現象である。

この「ノイエ・ドイッチェ・ヴェレ」の時期には、本当にいろいろなグループがいろいろな歌を歌っていたのだが、その歌詞はほとんどがくだらない、取るに足らない内容のもので、例えばトリオ (Trio) というグループはこんな歌を歌っていた。

Da, da, da.	ダー・ダー・ダー。
Ich lieb Dich nicht,	私はお前を愛していない。
Du liebst mich nicht.	お前は私を愛していない。

曲（歌詞）はまだ続くが、その全てを紹介する意味はないと判断しこれだけにしておく。また、もう一つアルノー・シュテッフエンス (Arno Steffens) の『スーパーグッド』 (Supergut) という曲の歌詞は以下のである。

Is ja alles supergut, ne?!	ほんとみんなスーパーグッドだよ。
Wunderbar, wunderbar, schön schön.	素晴らしい素晴らしい、きれいきれい
Ja ja ha ha.	ほんとほんと、ハッハー。

3分ほどの曲だが、この曲の歌詞は以上の3行のみであり、それが繰り返し歌われるだけといった具合である。ただこのシュテッフエンスの方については、たまたまビデオクリップを持っていて、それを見ながら聞くとなかなか興味深い。2人の男が（これがこのグループのメンバーなのだが）曲に合わせて別々の行動をしている。1人はスーツ姿に着飾ってワインを飲んだり、プラ模型を作ったりしている。もう一人は労働服で何かに鉄ヤスリをかけたりしている。どうやらこ

の2人が演じているのは東と西のドイツ人であり、当時の経済情勢を反映して、西の裕福と東の貧困を対照させているようなのだ。それでいて双方とも同じ上の3行の言葉をつぶやいている。当初は西の優れている様子を賛美しているような感じを受けるのだが、ワインのグラスが落ちて割れたり、プラモデルがぐちゃっとつぶされる画面では、裕福とされる西の生活に疑問を投げかけているようにも解釈できるのである。しかし、これは歌詞そのものからではなく、歌詞に映像が加わることにより初めて生まれるイメージということができるものなのである。

さて、この時期それ以外で特によく知られていたのは、先にも挙げたネーナ、マルクス (Markus)、エクストラブライト (Extrabreit)、ペーター・シリング (Peter Schilling)、フーバート・カー (Hubert Kah) といった歌手・グループだった。他に異質な存在として名前を挙げておいたほうがよいと思われるのは、イナ・ディーター (Ina Deter) という女性の歌手である。彼女も初めは「ノイエ・ドイツェ・ヴェレ」の流れの中で活動していたが、やがてウーマンリブ、つまり女性解放、女権拡大、女性の権利を訴えるような歌を歌うようになっていくことにより注目された。『この国 (ドイツ) は新しい男性を必要としている』 (Neue Männer braucht das Land) とか、『女性はゆっくりとやってくる・・・しかし力強く』 (Frauen kommen langsam,--- aber gewaltig) というような歌の題名を挙げればだいたい想像がつくであろう。

「ノイエ・ドイツェ・ヴェレ」が終わる頃になると、ほとんどのグループは解散してしまうか、あるいは英語で歌うようになった。そして、この「ノイエ・ドイツェ・ヴェレ」の時代の次に出てきたグループやシンガーには、ディー・エールツテ (Die Ärzte) やディー・トートン・ホーゼン (Die Toten Hosen)、ヘルベルト・グレーネマイアー (Herbert Grönemeyer)、またマリウス・ミュラー＝ヴェスターンハーゲン (Marius Müller-Westernhagen) などがいる。これらのグループ、シンガーはドイツにおいては今やいずれもビッグネームであるが、その歌には、きわめて政治批判的な内容のものが多く、いうならば攻撃的、挑発的、煽動的といえるようなものである。とくにディー・エールツテとディー・トートン・ホーゼンについてはそれが言えるだろう。

ドイツ統一は1990年のことであるが、その統一後にも旧東ドイツの地域、ホヤースヴェルダ (Hoyerswerda) やロストック (Rostock) などの町で、トルコ人家

庭を襲撃して死者を出すような恐ろしい外国人襲撃事件が起きている。また、それ以前にもサッカー場のフーリガンやら外国人を攻撃するスキンヘッドの若者もいた。その数はもちろんそんなに多いわけではないが、彼らがドイツ社会に残した爪あととは大きいものである。こうした青少年と暴力の問題はドイツでも深刻なものであるが、音楽の世界でも例えばシュテークラフト（Störkraft）のように、ヒトラーのナチスを賛美するようなバンドもあった。

しかし、そうした新しいナチス、つまりネオナチと戦う道もある。コンサートでスキンヘッドやネオナチと戦う勇気を呼びかけるミュージシャンやバンド、歌によって右翼や暴力反対の姿勢をはっきりと訴えるものも少なからずいるのである。ディー・エールツテやディー・トートン・ホーゼンはその代表的存在といえるのである。

（本誌の執筆条件の都合により、今回はここまでとする。続きは「ドイツ・ポップス小史（2）」として、次回あるいは他誌に寄稿する。）

〈参考文献〉

- 1) Rock & Deutsch - Deutsche Rock- und Popmusik seit 1989, Textheft mit Didaktisierungsangeboten, Goethe-Institut, 1995.
- 2) Gefühl & Härte - Zur Geschichte der deutschen Rockmusik, Textheft, Goethe-Institut, 1988.
- 3) Mein Gespräch, meine Lieder - Liedermacher im Deutschunterricht, Langenscheidt, 1986.
- 4) Schau ins Land - The German-Language Audiomagazine, Jahrgang 17, Nr. 4 (2003)

〈音源〉

- 1) Nena: 99 Luftballons, aus dem Album: "NENA", COL 491268 2, 1983, 1998 Sony Music Entertainment.
- 2) Rio Reiser: Alles Lüge, aus dem Album: "Das Beste von Rio Reiser - König von Deutschland", COL 476590 2, 1994. ebd.
- 3) Patrick Lindner: Hast du heut' wirklich schon gelebt, aus dem Album: Die Hitparaden-Hits des Jahres 97, CD1. BMG Ariola, 1997